
ピンクパラソルの女

因幡素兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピンクパラソルの女

【Nコード】

N60321

【作者名】

因幡素兎

【あらすじ】

患者の名前は霧島翼と霧島翼

この二人を診療して、医師の阿乃連枝は、もう一人の患者を見つけた。

ピンクパラソルの女

その女の人はピンクのパラソルを持っていた。

高いビルの谷間をそのパラソルで浮遊しながらゆっくり空を飛んでいく。大きいビルから小さいビルへ段々下へ降りていく。

ピンク色のパラソルは魅力的なその人にはぴったりの色で、日傘を差したスリムなてるてる坊主のようにユラユラと空を舞い降りるのだから、憧れてしまう。

そしてどこからか音楽が流れてくるのだ。風に乗りながら空を舞う音楽が……。

チムチムニー チムチムニー チムチムチェリー

わたしは煙突掃除屋さん

チムチムニー チムチムニー チムチムチェル

まちいちばんのかほう者

みなさん聞いてくださいな

煙と灰を友として

一日働きつづけても

広い広い世の中に

こんなのにきなことはない

足のさきから頭まで

すすをかぶってまっくろけ
それでもゆく先ゆく先で
煙突掃除は大かんげい

わたしの住まいは雲の中
煙うずまく煙突の
星の間近いてっぺんは
ロンドン塔より まだ高い
なんてすてきな そのながめ

チムチムニー チムチムニー チムチムチェリー
わたしは煙突掃除屋さん
さあさ みんなで 歌いましょう
ウラララララ チムチム チェルー
チムチムニー チムチム チェリー チムチェルー

♂
♀+

「やあ、こんにちは。」

午後になると白衣を着た（たぶん）先生が診察にやってきた。白
いだけの部屋または病室にはとてもお似合いな格好だったので少し
安心した。

正直ここまでの流れは思い出しても現実味という物が一貫してあ
やふやだった。

目を覚ますと自分の部屋で倒れていて身の毛もよだつような光景
を見てまた意識を失い、そして次に目が覚めたら変なソファアのあ
る絨毯の部屋で大人達に色々聞かれてまた意識を失った。そして今
度は病院の臭いのするこの白い部屋で目を覚まして……何で僕

はここに居るんだろう？

でも一つ分かることがある。どうやら父さんと母さんが死んでしまったということだけは繰り返し大人達に知らされていた。

「この部屋明るくていいよね？南向きの良い部屋だなぁ。」

先生は白衣のポケットに両腕をつっこんで伸ばしてバタバタさせながら、入り口を見つけるように話しかけてきた。

黒縁の眼鏡に大人しそうな白い顔をしている二十代前半くらいの先生で、雰囲気は物腰の柔らかい大学生のようだったので、僕は少し安心した。だってこれまでの大人達はみんなビッシリと着込んで強面だったから・・・。

「それにしてもキミ、噂以上に綺麗な顔してるね？」

「え？」

「いや、ナース達がキミのこと天使みたいだって言ってたからさ。ごめん、そうゆーの嫌いだったかな？」

僕は反射的に首を横に振った。別に綺麗だとかって言われるのは慣れていたから・・・とゆーかむしろ僕からすればナースの人たちの方が天使のように見えたものだけど。

「昼ご飯は？ちゃんと食べれた？」

先生は丸椅子をベットの横に寄せて座った。

「先生は・・・？」

聞き返すと先生は満面に笑顔を浮かべる。

「残念なことに今日は喰いそびれちゃったんだ。昼って結構逃しちゃうんだよね。」

笑ってる割には残念だと嘆いている、余程返事を返してもらったのが嬉しいらしく先生はテンションを上げてきた。

「ちゃんと食べました。さっき。」

答えると何故か先生は急に感情が消えたように数秒僕を見つめた。そしてそれからすぐに気がついたように「そうか、そうか、ソレは良かった。」と言いついた。

「ねえ、ところでキミはここ最近何か変わったことはある？いや、

もちろんご両親の事を除いてね。」

先生は”思い出したくなかったら無理しなくてもいいんだけど”と付け足して窓の外空を見つめた。

変わったこと・・・確かにこれまでの一連の流れは真に変わったことと言えるけど、ソレを除くとしたら何かあったろうか？

ああ、そう言えば・・・。

「夢を見るんです。」

「夢・・・どんな？」

先生はすぐに聞き返す。妙に入り込んでくるような聞き返しに僕は少し戸惑ったけど、これが医師による（たぶん）診察だという事を思い出して続ける。

「何か都会のヒルズのとっぺんから綺麗な女の人がピンクの parasol で降りてくるんです。こんなふうにゆっくりユラ、ユラ、って。」

軽く身振り手振りを入れてみると、先生はその動きに合わせて自分も手をヒラヒラさせながら「ユラーユラー、ね。」と難しそうに眉間にしわを寄せた。

「夢だね、それは。」

しばらくムムと考えるような素振りをしてからそんなことを言う。妙に真面目な顔を作ってそんな当たり前を。

「はい、最初に言ったとおり夢です。」

僕は答える。そしてすこしお腹の辺りから安堵のような笑いがこみ上げてきた。

「先生って意外に可愛いですね。もっと真面目な雰囲気してるのに・・・。」

「よく言われる。」

先生は何故か得意そうにニタリ嗤いを浮かべた。この人は見た目よりひょうきんで面白い人だ・・・。僕は思った。

「その夢、毎日見るの？」

先生は笑みを残したまま自然に聞いてきた。

「はい、毎日で。ほぼ。」

「いつ頃から？」

「……いつ頃……？あんまり毎日見るからいつからなんて忘れちゃったけど……、」

「一年くらい前から……かなあ？」

「そう、一年くらい……長いね。」

先生は平然と感想を述べるように言っただけで夢の話はソレで終わった。先生と僕はそのままそんな調子でいくつかの会話をした。

最近の学校のこと、趣味、テレビ番組のこと、基本的には間違った路線ではなかったけど、診察という枠組みの中では滑稽だったと思う。

それでも何か、少し安心した。

ここで目を覚ましてから僕は強烈な不安感に押し潰されてしまいそうな気持ちだったから……。

「先生、ところでここは何所ですか？」

安心してきたせいか僕はいくつかの疑問にやっと取りかかる必要性を思い出した。

先生はその当然の質問に嬉しそうに笑った。

「そうだね、ここが何所か、いま自分がどういう状況にいるのか？気になるよね？」

コクンと頷く。先生を見つめたまま僕はその優しそうな貌に何を言われても大丈夫だという信頼を感じた。

「ここはキミの思ってた通り病院。キミは一昨日の晩に両親を亡くして警察につれられて、昨日、家庭裁判所で精神疾患を認められてこの病院に入院してるんだ。で、僕はキミの担当の医師。」

なるほど僕は精神科病院に入院している精神障害者なのか……。

「精神疾患って具体的に僕はどんな病気なんでしょうか？」

先生の言うことはおそらく本当だろう。実を言えば僕には前々から心当たりがあった。

「うん、とりあえず今はまだその内容を探ってるところだから。」

それにおいおいゆっくり話していくから、ね。」

そんな優しい笑顔をされたらそれ以上何も聞けなくなってしまう。でも良かった。先生ならきつと僕を治してくれる。

「チムチムニー、チムチムニー、チムチムチェリー・・・って知ってます?」

そう訊ねると白衣の男の人は一瞬意味深な表情をした後、両手を打った。

「聞いたことあるね? 確か昔の・・・」

「そうそう、大昔の映画で女の人がパラソルで浮遊するやつの歌なんですよね。」

あたしは男の人の言葉を最後まで聞かずに答えを言う。男の人はキョトンとしてから「そう、そう大昔の、ね。」と言った。

「それが、どうかしたの?」

「夢で女の人が歌ってるんです。てゆうーか夢の中のBGMにその歌が流れてるんです。」

「・・・夢ってピンクパラソルの、だよな?」

「あれ? なんで知ってるんですか? そういえばあなた誰ですか? ソレにここ何所?」

||

最初に言っておくが私も心理療法士として一つの知識体系のもと彼等患者と向き合っていく者である。それはどれだけナチュラルな人間関係を患者との間に築こうとも変わることはない観る者と観られる者の立場なのだと思っている。

しかしその上で精神治療とは医師自身が患者の精神的困難に飛び込むことでもある。それは逆に観る者をして観られる側の主体的な枠組みに属する行為でもあり、観る者という客体的な立場は医師にとって不可知に近い辿り着くことの出来ない値であるといえ、それ

はつまり彼等の病気はその診療が発展的であればあるほど我々医師自身にも影響を与えうるものであるということだ。

いわば私は彼等を診療するに当たって、自分自身にも大きな心の変動を来すことを余儀なくする、と言うことである。

そしてこの話は性的もしくは支配的な様々な要因を持つ精神疾患等とは起源たる点においてまったく異質なタイプの類い希なる患者のことを記述するものである。

霧島翼は23日午後十一階マンション自宅で両親を亡くしている。その折り翼はすぐには警察にも病院にも連絡は入れず、朝方になって警察に連絡を入れた翼は自供し、そのまま家庭裁判所に連行され、人格内に異常性を来していることを裁判官がその場で認め、翼をこのイツカノ精神科病院で入院治療を受けさせるように判断を下したものである。

翼の症状はいわゆるDID（解離性同一性障害）と呼ばれる精神疾患である。その事実を初診にて私は確認し、鑑定医として警察、裁判所に通達を入れた。

ここで精神疾患と軽々しく言っても我々はパツとしない感があると思う。現実問題、精神、つまり心という立場は手に触れられない特徴を備えているため我々合理主義的な社会においてその立場は何か超越的なもしくは虚構的な存在として認知されやすい。しかしその反面精神疾患という症例は現在過去おそらく未来に渡って人々が直面し続ける一種の「手に触れられない事故」という在り方を無視することは出来ない。しかし、手に触れられないと存在しないような諦め方は合理的では無く発展的でもない、むしろ縮小的であり空想に逃げる行為と言って正しい。そう考えた先人達が「心理学」という科学的合理主義な精神的な客観理論を発展させた。そして心理学とは人間の感情の働きを「ホルモン」「脊髄」「脳神経」などというものに付随するといった説明を行うものではなく、いわゆる「心の問題」を「心」の働きに応じて「心」によって解明し研究する学問分野である。

つまり我々精神疾患を客体から携わる者「心理療法士」とは宗教や哲学、形而上の諸々の主観的な学問と同じ「心」を相手にしながら、宗教哲学よりは遙かに、ソレに対して実際の場に役立つ触れられるものを見つける存在であり、精神疾患とは決して手に触れられない存在ではないと主張する者である。

結局の所我々は触れられないものは無視するしかないのだが、その存在自体を押しつけられる場合（つまり敢然として存在するこの心という存在の自覚）に対して触れ得ようとする行為は避けられない。

それはその上でその患者の生傷をどう治療し時には手術し回復させるかを診断し、患者と共にその回復の過程を歩む者であるためであると同時に我々自身もその心の問題には何時いかなる時も悩まされる人間そのものであるからである。

これらはこの話において最初に言っておくことで言ったとおり、私が心理療法士として患者達と接することが、物理的な事象を客体から観察する客観科学の諸々ともその逆である哲学宗教学などの主観科学とも、また違う、もっと捨て身な存在であることを強調づけたいとの意図である。

霧島翼は自分の内面（心）に二つめの人格を所有している。一人は元々の霧島翼本人、もう一人は何らかの原因で発生した霧島翼の二つめの人格である。

DIDという症状は普通、幼児期などの多感期に両親からの虐待や性的暴行により破綻した精神がガン細胞のように発生し精神内部より破綻していくのを自己防衛するために「無意識」が働きガンとなった破綻部と正常部とを解離し区別する役割である。

この防衛機能により本人は傷の痛みを脳内麻薬により緩和されるかの如く「忘却」した安定的な状態を獲得することが出来る反面、傷口は本人からは隠されただけで今もガン細胞をもって本人を蝕んでいることは明らかな事実である。

そして時としてその破綻部が性質を得て表面に隆起した状態を「

「D I D」と呼び、一人に二つの人格が認められるという矛盾を生じさせるものである。

翼の場合、人格は表裏の特性が強く、「女性型」と「男性型」の二種が確認された。

初診により分かったことは男性型は精神的に軟弱で鈍感な性格であり、凶暴性や知能犯的な特徴は観られない。それに対し女性型は多少神経質で外向的ながらも一般の女子高生と遜色を感じさせない、異常性は是と言ってみられないのである。

両者とも自分自身の傷害に気付いていなく（お互いを知らない）無意識下でのみ認知した背中を会わせたような関係に成り立っていると言える。これはまれなケースである。

普通、D I Dではベースとなる元々の人格に対し生まれた二つめの人格は産みの親である元々の人格を認知し、元々の人格は二人目の自分を認知できていないものなのだ。

これは先ほども説明した「無意識」による「忘却埋め立て」の隠蔽工作（防衛機能）の為、本人格は偽人格を知っているのは防衛自体が成り立たないためである。

しかし今回は偽人格側にも本人格の存在を忘却させているという不必要な作用を観る。

是はいったいいかなることなのか？と考えたとき、「傷」の存在の不明性に繋がる。

やはり解離の原因となるガンの起源的な性質がこれまでとひと味違うのかも知れないと想像できるのである。

普通、傷を付けられながらも抑圧された感情をひた隠しにする機能だが、それが傷ではなく抑圧された者でもない何かであり、その何かは本人にとって解決しなければならないと感じるものであるならば・・・どうだろう？もしくは彼女は人格を二つ創ること自体に必要性を感じたのではないだろうか？そうすればまったく傷による異常性を感じないのもうなずけるのだ。もとより傷などを隠す為ではないのだから。

そして彼女は・・・ここで彼女というように霧島翼は性別をれっきとした女性であり、見た目には非の打ち所のない美貌を備えている。が彼女自身がベースとしている人格はどうやら男性の方である。これは彼女自身が以前よりいわゆる性同一性障害を起こしていたことが原因であるが、その障害事態が後天的であるか先天的であるかについては多種の検査を明後日まで実施中である。

どちらにせよこの性同一性障害をもってDIDとの深い関連があると観ることは当然であり、私が検査結果が出ようが出まいが次のカウンセリングを患者に行うことは是非もないのである。

私がするカウンセリングの最初は、まず彼女か彼に会い、その含みある「夢」について心あたるところを聞くことである。これは最終的に両方の意見を聞き分析するものだが、この夢の作用より無意識的な働きを引き出せるはずなのでおそらくは両方の意見は非常に密接な関係をはらんでいると予想されるだろう。すると二人の間にとぐりが生まれそのたぐりを持って引き寄せることにより、ついには因果関係の糸を明確にすることがなり、原因を突き止め、具体的な治療をする「触れることを可能とする」のである。

O

ママが死んでいた。頭を横たえて。

朝目が覚めるとベッドの上でママが死んでいた。割れて外と繋がった窓の向こうを見るとやっぱり今は夜だった。

少し息苦しかったわたしは、正確にはベッドの上のわたしのお腹の上で死んでいるその人を、すり抜けるようにベッドから身を離れた。

ベッドから降りるとママはぬいぐるみの様に簡単にベッドの下へ落ちた。

足下に転がったその人の頭からは血が滴っていた。

わたしは笑った。可笑しかったから・・・。何もかも可笑しかった。

たから笑った。

何もかもうまくいった。自分でも信じられないくらいに……。首筋にヒリヒリと若干痛みを感じていたのでさすりながら、そのままゆっくりと割れた窓の所へ歩き下を見下ろす。

十一階の窓から見下ろすと暗がりの中うつすらと何かが落ちているのを見つけた。パパがちゃんと死んでいたのだ。

わたしはもっと笑った。可笑しかったから……。全部、可笑しかった。それなのにわたしはそのまま意識を失った。

♂
♀
+

この病院に来てから二日目の朝、僕は看護婦さんから朝食をもらうと、外に出るときは呼んでくださいと言われた。

どうやら病院の外には公園がありその範囲内は観察者が付き添う上で自由な生活が出来るそうだった。

僕は午前中とりあえず色々見て回ることにした。朝食を届けてもらった看護婦の渡辺さんと一緒に病院の中を在る程度見て回った。

患者さんは僕以外にも当然居たし、トレーニングルームという場所ではリハビリ用の運動器具などが自由に貸し出されていた。1階広間にはほのかにクラシックのミュージックがかかっていた。広間の一角に並べられたソファアの正面には大きな液晶テレビがあったり、壁が一面ガラス張りで外の景色が一樣に見渡せた。

病院内は総じて清潔な白い壁で覆われていた。何か潔癖な感はあるけど一種には守られているような秩序感が安らぎを与えてくれる気もした。

他の患者さんの中にはどう見ても普通の人間から奇声を上げたりブツブツと念仏を唱えているような人がいたり多種多様だった。もちろん老若男女、年齢層も多様だった。

奇声を上げるような人を見て、僕が怖がると看護婦さんが両肩を持って”大丈夫ですよ”と言ってくれるので安心して僕は外に出た。

病院の外はタイル張りの路面から噴水のある広場を抜けるとすぐに一面を道のある森に囲まれていた。どうやらこの病院自体が大きな公園の中にあることを後ろを見渡して僕は分かった。

病院は背の高い白い箱のような形をしていて、その後ろにもたくさんさんの深い緑が空の下に広がっていたのだ。

僕は看護婦さんに案内してもらいながら森（公園）を散歩して昼時には病院に帰ってきていた。

半日をかけて見て回った感想は、一言で言ってもこの病院は巨大な慰安施設のようなものだということだった。

午後病室に帰って来ると看護婦さんは当然自分の持ち場へ帰っていった。何かあったら枕元の呼び出しスイッチを押して欲しいと言うことだった。当然だが僕は自殺願望者というわけでもないのに四六時中見張りが付いているわけではないのだ。

昼食をすませた頃、先生がやって来た。

片手に果物の入ったバスケットを持っている。

「リンゴ、食べるかい？」

先生はバスケットを肩の辺りまで軽く持ち上げて陽気に言った。

「いらないます。さつき食事を済ませたばかりですから。」

「そう？」

先生はおいしいよ？と言って丸テーブルの上に果物の入ったバスケットをおいて僕のベットの横の丸椅子に腰掛けた。

看護婦さんが去って少し気落ちしていたので先生がすぐに来てくれて僕は少し嬉しかった。

「どう？調子は。」

「ええ、何だかここは居心地のいい場所ですね？」

「学校のこととか、気にならない？」

「少し・・・でも、まあたまには・・・。」

そういえばもう今頃は新学期が始まってるとんだな……。窓の外
の春空を眺めると、僕は何かとてつもなくつい最近までのことが遠

くへ行ってしまったような気がした。

それから僕と先生はたわいのない話をいくらか交わした。

「ねえ、昨夜もあの夢を見た？」

先生が言った。くだらない冗談を言って笑いあった後、すぐに向き直るように。

「・・・見ました。また同じ夢でした。いつもどおり・・・」

「ピンクパラソルの女の人がフワフワって？」

「はい。」

頷き僕は先生が何を思考しているのか見えるわけでもないけど、その先生の顔を見つめた。

「じゃあさあ、」先生は眉間にしわを寄せた後ひらめいたように切り出した。

「その夢と何か関係の在りそうなことって思いつかないかな？」

「・・・ソレはもう言ったけど・・・」

「映画・・・ですか？ チムチムチェリーの曲が流れる・・・」

「それ以外には？」

僕はジリつと詰め寄られるような不快感を感じるけど少し考えてやっぱり、

「ないです。たぶん。」

と答えた。すると先生は小刻みに頭を上下に揺らす。

「そっか、そっか、そうだね。うん、思い出せないことは仕方ない。」

すると僕はパッと脳裏にある映像がフラッシュバックされた。

「あ・・・」

「なに？」

先生は飛びつくようになってわけでもないけど内心そんな気をはらんで聞き返した。

「そう言えば、パラソルの女の人ってよく考えたら近所に住んでるお姉さんに似てるかも・・・」

「その人は？」

「はい、漣っていう喫茶店の店主なんですけど、すごい綺麗な人で、自立してて、楽しそうで、カッコいいんです。」

「お姉さん？・・・自立しててカッコいい・・・。そう、わかった。ありがとう。」

先生はソレだけ聞くとすぐに引き下がった。僕は何だか訝しくて聞き返す。

「その人の名前とか？いいんですか？」

「うん、大丈夫、もう充分聞けたから。」

なんか、簡単な感じがするなあ。

先生と僕はそのまま幾つかまたたわいもない話をした。学校の友達はどうな子がいるかとか異性に対するタイプとか、時々心理学的なトリビアを聞かせてもらえたりもして、そう言うときもすごく面白かった。

先生は優しい人だ・・・。僕はいつの間にか先生に強い友情のようなものを感じていた。

「あれ？先生来てたの？」

気がつくと目の前に先生が見えていたので、あたしは相当ボーっとしていたらしい。いつもながら我ながら・・・。

「いや、ごめん。キミがボーっとしてるからね。声をかけないで見とれてしまっていたよ。」

あっは、相変わらずお世辞が口からポンポンと。

「先生って調子いいよね。」

「よくいわれる。」

ニタリと笑う先生。こういうと絶対こう返してくる。

「ところでさあ、ちょっと聞きたいんだけど、例の夢について・・・。」

ゆめ・・・？ああ、ああ、あれね。

「・・・ピンクパラソルの？」

「そう・・・。」

「いいよ。で、なに？昨夜も見た？っていうんなら見たけど？」

「そうだよな。それでさあ、キミはその夢の女の人に何か心当たりがあるんじゃないかな？」

先生はニッコリ微笑んで”どう”と膝に両肘を突いて両手を前で組んだ。うん、診察らしくなってきた。

そんであたしはまあ、そう言われればそうゆう気がしてくるわけ
で・・・あ、

「そいえばみゆきさんに似てるわ、確かに。」

「みゆきさん、・・・その人は？」

先生は余裕ともとれるような莞爾を浮かべた表情で聞き返す。あたしはマジメ、この人を一度困らせてみたい。

「漣って喫茶店のマスターで、メツチャメチャ綺麗な女の人。かなりヤバイよ、一回見てみな・・・あ、やっぱ止めた方がいい。先生好きになっちゃうもん絶対。」

「はっは、そんなに綺麗な人なの？すごいなあ・・・。」

いや、マジ会ってみれば笑ってらんないくらいだけどね・・・。実際、この先生がみゆきさんのオーラに浮き沈みする姿を是非拝見したいよ。

「・・・で？キミはそのみゆきさんに憧れてるんだ？」

「・・・。」

「・・・先生って相変わらず鋭いねえ」

「まあね。」

ニタリと笑う。先生のこの表情は曖昧な返答を成功させる方法と見た。ま、どうでもいいけど。

「ソレがどうしたの？」

「うんうん、夢の中の女の人は君たちの憧れってことが知りたかったんだ。」

まって・・・この人今なんて言ったかな？妙に違和感のある文章だった気がするけど・・・まあ、いつか。

「憧れもあこがれだよ、みゆきさんは……。それによく考えてみればチムチムチェリーの曲の映画だって漣のカウンターの上のテレビでみたんだよね。確か、たぶん。」

「へえ……。」

先生は目線を斜め上に寄せて何か解けたみたいにコクコク数回頷いた。何が解けたのか知んないけど眼鏡が光反射してちょっと怖いよ……。

その後はあまり関係ない話をした。もう長いこと学校に行っていないことや、好きなテレビのこと、それに男の子のタイプの事とかは少し恥ずかしかった。

あたしは理想の男性って言うところ……先生みたいな人が好きかも知れない。

||

えーっと、何と言うべきか……。どうやら彼も彼女も両方ともお互いを知らない上で一番すぐに疑問に感じる、「成り立つのか？」ということは彼等自身の無意識のごまかしにより可能となっているらしい。

つまり普通自分の記憶が曖昧だったり、飛んだりしていれば自身可笑しいと思うし、尚更自分の部屋や暮らしが自分以外の誰かによって移動されると気がつけば、何かしらのアクションを起こすのが正常だが、彼等の場合、お互いに関係する内容はすぐに「放り投げてしまう」「作り替えてしまう」そんな癖が定着しているようだった。

例を挙げよう。

男性の彼は以前までは毎日学校に通って普通に性同一性障害者の様に男の子の心で生活していた。そして外にいる間は一様に霧島翼はその男性としての人格を通していた。と、この点が私が言う彼をして霧島翼の本人格だと判断させた。

そして二人目の人格「女性」だが、彼女は実は日常の中ではほとんどその役割を男性の側に任せて眠っていることが分かった。と、いうのも当然だが学生の半日を司る学校生活の一部始終を男性側が受け持っているからだ。学校に関係するあらゆることは男性の領分であり、女性の側は自分は学校にもうかれこれ9歳の頃から通っていないし、友達もいないと言いきっているのだ。そして彼女に私が”普段昼間は家の中で何をしているの？”と訊くと”お父さんと一緒にテレビを観たり遊んだりしてるよ”と嘘を事実としてつくのだ。実際家庭裁判所から送られた資料では霧島翼は多少精神に性同一性障害の気が見えても正しく学校に登校していたことになっているのだ。

もちろんこのような勘違いは確実に家族間でも露呈するだろう。例えば父親と昼間に居て学校に行っていないという設定を当然の如く父親に昼間のことを話せば、当たり前だが食い違いが起こる。そしてそれ以上にこの様な二重生活的な記憶の齟齬や性質の反転を両親が今までに異常だと気付かなかったはずが無く、それについては今、少し調べを入れてもらっているが、だいたいその先は読めるのである。

とにかくこれは正しく彼（無意識）の隠蔽工作と言えるだろう。彼女は自分では経験していない時間帯を偽造されて記憶に持っているのだ。おそらくはこのほかにも周囲の指摘や反応、ありとあらゆるお互いへのヒントを彼等は無意識的に避け、今日この日まで背中合わせの生活を生きてきたことになる。

大変信じがたいことだが「無意識」とは人を守るが時としてその人自身が独善的な在り方で社会的に不利になる事を起こす怖い者でもあるのである。

無意識の作用。ここで無意識無意識と連呼するが、一言で言うて無意識とは何か？を説明しておこう。

「無意識」とは我々人間が持つ自我とは別に脳が備えている意識外の枠組みである。

つまるところ空きスペースとして私用しない特徴を持ち、意識的なコントロールを受けない精神機能で、それは精神よりも根底となる精神と考えていい。

役割としては我々の自我よりもよっぽど合理的で消極的な「忘却」「模倣」「予測」などを行い、それは雑多な感情を含まない代わりに強い影響力と性能（計算能力）を有する主観的な根底の存在である。多くは夢などが例に挙げられる。

彼「無意識」が働くとき人間は意識的な認識をとらないので無意識的な行動を自分では理解することは出来ない。ゆえに人間は時には感情を廃して事故利益につとめることを可能とするものである。

（例、とっさの自己防衛など）

ここで一つ症例を上げておこう。

”これは少し前に私が受け持った若い女性の患者の例である。その女性は仕事帰りに買い物へ寄ると必ずと言って万引きをしたくなる衝動に駆られる。そしてソレを自我により拒絶しようとする、今度は自分でも知らぬうちにカバンの中に商品を混入させてしまうという深刻な症状に悩まされていた。彼女は数度にわたって犯行を取り押さえられていて、幾度もの警察沙汰に及んでもどうしてもその症状が治らないということだった。私は数度にわたる診療の結果、彼女に催眠療法をかけることを決断する。と、いうのも彼女は自らが知らないで犯行を余儀なくする症状をウソではなく真実に述べていたからであり、これはつまり彼女自身の「意識」の外で実行された行動であるということだからである。彼女自身の「意識」の外で決定された行動は彼女自身が「意識」の元で把握することは困難であり、ゆえに私は彼女は「無意識」的に知らぬ犯罪をおこしていたと診断したのである。

結局この患者は催眠療法により無意識下の記憶を呼び起こすと、少女時代の両親や友人などとの人間関係の軋轢や齟齬により、精神的不安定と多量の希求心を募らせた結果、一度万引きを繰り返し、それが発覚したときに両親とのコミュニケーションを取ることに成

功し、その時に一度万引きをすっぱり止めていたが、程なくして大人になり就職をし一人暮らしをし、今また押し寄せる孤独と孤立心、底からわき上がる希求心により無意識的に万引きを再開していたのである。”

この様に無意識とは人の認識外に影響する者である。

霧島翼の場合。DIDとしての記憶の不一致があり、しかしそれによる本人たちの自覚症状はないゆえに本人たちは病気に気付いてさえ居なかった。つまり霧島翼は意識レベルでは二人存在するが無意識下ではその二人は共存のスペースを持っていることになるため、お互いの間接的な関係をつなぎ、無意識的にお互いを認知しているため、いや・・・無意識によりお互いを不可知と言った方が分かりやすいか・・・。

しいていえばあの二人は無意識の思考によりお互いを解離させそれを保っているのだ。

私は少し考えた。無意識は作用を起こすが、リアルに二人の感情まで左右するだろうか？二人がお互いを故意に知らないように思考を推し進めるなどあり得るだろうか？

一つにそれが事実ならば彼と彼女がお互いを知り合いこの異常状態を治療するのは不可能と言うことになってくる。

なぜならばそれは無意識により邪魔だてされることが目に見えているからである。

無意識がソコまでの働きを可能とするならば、もはや彼に適う方法は無いと言わざる終えない。第一に心理療法とは患者自身が結局の所行うのがメカニズムであるからにして、患者自身を患者自身の影なる者が完全に掌握している以上は治療は難しいのである。

だがしかし、私は無意識がそれほどの役割を果たすなどと言うことは信じはしない。ソレを信じることは是までの私の経験や知識を否定することでもあるし、それ以上に彼等二人の治療を絶望視するようなものだからだ。

無意識とは感情的な複雑性を好まないので意識下に影響を及ぼす

場合、その影響はその場の気分的なレベルを超えない。つまり先ほど上げた症例のように意識を排除していないと行動にならないのである。故に断じて患者自身の意識的判断を大幅に左右し理性までを自由にもてあそぶなどという芸当は少なくとも覚醒中には不可能なのである。

霧島翼の両名は、お互いを故意に知らうとしないと思えるほどの矛盾を見せているが、その正体は果たして本当に無意識だろうか？二人は意識レベルで無意識に操られているというのか？

本人が自覚しない精神疾患の要因は無意識が知っていて疾患事態を無意識が引き起こしている事は定説だが・・・この霧島翼のパターンに関して、私は是までの定説は容易に当てはまらないと思っている。

そして、私は断じてその正体を突き止めたいと思っている。

あたって私は少しばかり調査に出かけることにした。

次に彼等に会ってからは聞くことは一つ。その両親についての想いを訊いていこうと思う。

「先生、やっぱりそうでした。」

コートを取って出かけようとするナースの渡辺さんに呼び止められた。彼女はいいそいと小柄な体をこまめに動かし私の前まで来る。

「霧島翼ちゃんのご両親は以前にも何度か町の精神科に予約を入れていきます。ですが・・・」

「ですが？」

聞き返す私の目を見るナースは眉をハの字にしてフウッと鼻息を漏らした。

「予約はいつも最後にはキャンセルになっちゃうんですって・・・」

「そう・・・ですか・・・。渡辺さん、ありがとう、ご苦労様。」

私は彼女にねぎらいの言葉をかけると予想通りだったなと自分に頷き、部屋を出た。

「先生？どちらかへ行かれるんですか？」

出がけに渡辺さんに再び呼び止められる。私は振り返らずに後ろ手を振った。

「ちよつと、そこまで。」

||

私は霧島翼の住所や身元の資料を見ながら、その住まいの加々見町に来ていた。

加々見町は港向かいの加々見市本町で割と有名な町で、話に聞いていた通り港側一部地下鉄の駅を中心として完全なヒルズ街と化していた。どうやら二人のピンクパラソルの夢の舞台はここだろうと予測できる。

霧島家があるマンションはヒルズの外れの高層マンションで彼女の住んでいた部屋は最上階の十一階だそうだ。

私はまず彼女の通っている高校へ行き彼女の担任の先生に面会をした。

初老の白髪混じりの穏和そうな先生で話を聞くと細部まで知っていることを語ってくれた。

聞いている限りでは彼から聞いた内容とほとんど同じで、これにより彼の証言の方が彼女より事実に近いと言うことが確かに証明された。

高校での彼は明らかな性同一性障害の振る舞いで男子の制服を着ていたそうだ。女子の友達もいれば男子の友達もいる、いわゆるオナベのような体質でも、持ち前の大人しさと美しい容姿のおかげか妙な敵対関係はなかったそうだ。

そして彼自身からも聞いたことだが、彼は自分の体が女で在る事実をふまえた上で、自分自身は男としての心を持っていることを主張しているのであるそうなので、もちろん着替えや排泄などでは一線をわきまえていたそうだ。

学校でのことで何か他に異常なことが無いか聞くと、初老の担任は少し間をおいてから気がついたように語り出した。

「そういえば・・・去年の春先、そう・・・丁度今頃でした。彼女、午前中の体育の授業中にボールが頭に当たって軽い脳震盪を起こして保健室に運ばれた後、いつの間にか学校を抜け出したまま帰ってこなかったことがあります。」

私はご両親に連絡を取ったりてんてこ舞いになりました。真面目な子でしたから・・・何か事件に巻き込まれたのではないかと思っただいへん心配しましたのでよく覚えています。でも、結局は夕方には自宅に帰って普段と変わらない様子だったんです。いえ、私も仕事が終わってすぐに彼女の家へ伺ったんですがね。それに抜け出した経緯をほとんど覚えていなくて・・・彼女、何が何だか分からない様子でした。」

・・・経緯がハッキリしない？記憶がないって事か・・・もしや・・・

私はその他に何か変わったことはあったか一応訊いたがその他には何も無いとのことだった。これも彼女が学校関係にまったく関与しておらず、彼の優しいとも気が弱いともとれる性格を確認してあるために二人の証言に嘘や無意識による偽造が無いことが分かった。一応、担任との話の途中で出会った何人かの生徒にも霧島翼について訊ねてみたが、やはり特に違う事はなかった。ついでに言えば生徒達が言うには「霧島翼は」守ってあげたい”と思われるような生徒だったそうだ。これについても同感である。

私は初老の担任に礼を言い学校を出ると次に「夢」について調べる必要性を当たった。

最初に説明をしておくが、「夢」とは無意識の計算により意識内に投影される映像である。故に夢とは意識側からもしくは客体的な存在（つまり観察者である私）が患者の主観の根底である「無意識」に触れられる数少ないチャンスである。つまり夢は彼（無意識）自身が自からこちらへ手を差し伸べている状態なのだ。

よって夢を分析することは無意識の働きへのつながりを解くことにもなるのだ。

以上を思って私は「夢分析」のために喫茶店「漣」へと向かった。

喫茶店「漣」は加々見駅前桜通りという街路樹の吉野桜の綺麗な大通りにある、二重波線の看板マークの古っぽい喫茶店だったが、客入りは午前中だというのにずいぶんと賑やかだった。

外から見ると横長の屋根が日傘になっているかわいらしさの在る店で正面の壁は上半分をほとんどが大きな窓で店内を丸見えにしていた。

両脇には雑居ビルが間隔を置いて建てられてあり、ソコだけ雰囲気は私が子供の頃の街並みの様で懐かしい感触を受けた。

玄関を入ると”カラncラン”と金の鳴る音がして、目の前すぐに長いカウンターが出迎え、そのまま右側を長い店を奥まで見渡すと、なるほどソファ―椅子とが四角いテーブルを挟んで向かい合った席が窓際にファミレスの様に設置されており、余ったカウンター横のスペースにはまずオルガンがありそのほかのスペースには適当に机と椅子が並べられてある。奥の突き当たりにある道はお手洗いへ続いているようだった。

店内には極小さな音量で洋楽がながれていた。

「いらっしやいませ。」

元気の良い少女の声がしてカウンターへ視線を戻すと黒いワンピースのシンプルなエプロンをした高校生くらいの少女がカウンターから笑いかけてくれた。

美貌だった。

私は少し戸惑って辺りを見まわした。他に店員は居ないのか探したのだ。もちろん私だってこの澄んだ空の様な少女がこんな店で一人で働いているわけ無いと分かるぐらいの価値観はもっている。しかし、どうだろう？いくらみても中にいるのはエプロンもつけないで食事をしている客ばかりだ。

平日の昼前だというのにカウンター席に5人、窓際にカップルと男同士が二組。いくら駅前といえど他にファーストフードも駅構内のレストランもいくらでもあるというのに・・・そして、どう見ても店員は少女ただ一人なのだった。

私はまさかとは思った。聞いていた話とは大分年齢的に合わない気がしたが・・・しかし美人と言えばこれ以上ないような美しさだし、なにか美のオーラのようなものまで感じられるくらいだ。しかし見た目にはどこかあどけない。まあ、聞いてみれば分かることだが。

「えーっと、キミはもしかしてみゆきさんかな？」

私は注文の前に話しかけるのは何だか非礼な気がしたが少し妙な空間にきたような気がして気が動転していたのかも知れない。

「はい？そうですけど、そちらはどちら様ですか？」

少女は軽やかに答える。

私は手前の丸椅子に腰掛けるとキョトンと見つめるその絶世の美女らしからぬ無垢な少女にとりあえず気がついたように注文を言う。

「じゃ、じゃあとりあえずコーヒーを・・・ブレンドで。」

苦い味でも飲んで気付けをしなければ・・・どうやらこの店の空気は人間を無防備にする。

やはり店の店員は現在少女一人のようで少女（少女と言っても彼女が本当にみゆきさんだとすれば少なくとも二人から聞いた近所のれっきとした大人のお姉さんなのだが）は背中を向けながらコーヒーを手際よく淹れてあっという間に私の前に置いた。

「はい、おまちとおさま。ブレンドコーヒーです。」

私はそのコーヒーを手に取り一口啜ると苦みで少し意思が甦ってきたような奮い立つ気持ちを感じた。

フウッと息を吐きコーヒーカップを静かに机の皿に戻す。

その一部始終を見ていたようで少女は口の片端をジッパーで閉まったように寄せて閉じながら”それで？”とこちらを促すのだった。

「えーっと、そうだ。あなたがみゆきさんと言う方でよろしいん

なら、霧島翼という女の子をご存じではないでしょうか？」

「ああ、翼君？翼ちゃん？どっちも知ってるわよ？あの子うちの常連さんだもん。あ、そう言えば最近来ないなあ、どうしたんだろ？」

「・・・どっちも？まさかあなた、あの子が人格障害をもっていることを知ってらっしゃるんですか？」

「うん、知ってるわ。喫茶店のマスターともなるとお客さんの内情にも精通してるのよ。」

眼をパチクリさせてみゆきさんはちよつと得意げに後ろ髪を払った。美しい首筋まででカールした黒髪が弾力を含み揺れる。

「じゃ、じゃあ、・・・（大きな声では言えませんが、あの子達の両親が先週亡くなられて、あの子達をご両親の死に関与していると言うことも？）」

私はカウンターに身を乗り出して小声でそう訊いた。さすがにこのことは知らないように思えたのだ。

「（・・・マジ？）」

そして案の定みゆきさんは霧島家の事件については知らなかったらしい。それというのも霧島家の事件については解決が事件の翌日で裁判も一回で打ちきりで少女は未成年、マスコミも手を出す暇をもてなかったのだ。それにこの店から霧島家のあるマンションは少し離れているから噂も届いていないのだろう。

「ええ、大マジです。実はその件で私一応、あの子達の担当の医師なんです、一つ彼等の精神分析のためにあなたと会っておく必要があったので、このたびお話を伺いに来たわけです。」

「・・・ふむ、なんだか大変そうね。協力するわ。何でも聞いてよ。」

「はい、ありがとうございます。」

私は二人ともにについて知っている数少ない彼女に、二人のことを様々な角度から聞いた。しかしその返答もほとんど私が診察して得

た感想と変わらないものだった。それから私はさっそく二人の夢のことを詳しく話した。そして夢に出てくるピンクパラソルの女性のみゆきさん本人と似た女性であるためここに来たことも。

「メリー・ポピンズね。チムチムチェリーってゆる曲でしょ？アレ確かあの時の事ね、覚えてるわ。」

みゆきさんは片手を顎の辺りに添えて思い出しながら語った。

「確か一年前くらいかな？その日、平日の昼時なのに学校休みだったのか翼ちゃんが来たのよね。それでその時、丁度午後のロードショーでメリー・ポピンズの映画がやってて……。確か翼ちゃんジーってソレを見続けてたわ。あそこのテレビで。」

みゆきさんはカウンターの後ろから下げられた大きなテレビモニターを指さした。

「あの時翼ちゃん何か雰囲気がちょっと違って変だったからよく覚えてるけど。次会った時にはまたいつも通りに戻ってたわ。」

「そうですか、様子が違った……。ソレは具体的にどういう風に？」

「どうやら何か手がかりが近づいてきたように感じた私はにじり寄るように訊いた。」

「うーん、無口だったし、目線がうつろだったわ。ソレに……。少しいつもと言葉遣いが違った気がしたけど……。あの日はあんまり喋ってないからハッキリとは言えないなあ。」

とにかく何か別人みたいだったわね。でも、女の子ではあったみたいだから翼ちゃんの方だと思ったわけ。」

「別人……。いや、参考になりました、ありがとうございます。」

「いえいえ、何か大変そうだけど、翼ちゃんと翼くんにガンバってって言っというて下さいね。気の毒だけど病気じゃ仕方ないものね。」

「はい。そうですね。私も精一杯やってみます。」

私は丁寧に頭を下げるというの間にか自分が大分丁寧調なしやべり方であったことに気がついた。どうやらみゆきさんと言う人は人に少し後ろに退かせる様な力ももっているらしい。もしかしたらこの店のこの妙な浮ついて暖かみのある雰囲気はこの人のせいかもしれない。

「あつ、そうだ知ってる？」

コーヒーの代金を払って店を出ようとするとみゆきさんから止められた。

「はい？」

振り返る私にみゆきさんは言い忘れてたとカウンターから身を乗り出す。

「チムチムチェリー。あの曲って終始マイナー調で悲壮な曲調だけど煙突掃除夫の楽観的な詩が逆説として盛り込まれてるのよ。」

「はぁ・・・。」

私はそれが・・・何か？と首をかしげる。するとみゆきさんはニツと”分からないかなあ？”と言って微笑む。

「きつとあの子も地べたで灰まみれになって汚れても、何かを吹っ飛ばして笑いたって、そう思ってるんじゃないかしら？」

漣を後にして私は病院に戻る前に霧島家のマンションの住人に聞けるだけ少し霧島家の家庭のことを聞き込み、それから病院に戻った。

||

事件について話しておこう。

その事件は先週の終末に突如起こった。

誰もが予期しない午後十一時の窓ガラスが割れる音。静まりかえったマンションの十一階から闇夜に吸い込まれるようによく響いたことだろう。マンション十一階付近の住人の多くがその音で何か不

審には思ったが午後の十一時である、みんな総じて知らぬ振りをした。そして翌日の早朝七時、マンションには黒集りと警察のパトカーがひしめき、事件はまだ十七歳の少女が通報し自供する形で発覚した。

父親の死因は地上十一階の高さから落下した地面との衝突による衝撃。母親の死因は子供部屋の回転式の椅子による後頭部への打撃。少女は警察に護送されそのまま午後には家庭裁判所にて審議を行われるが、彼女は自分が両親を殺したことを連呼し続け、さらには時々気を失うとまるで別人になったように”なんのことも分からない”と一変して容疑を否認した。

これらの症状から裁判官は彼女が精神的に異常を来していることを判定し、裁判は打ち切り、病院で診察を依頼し彼女の精神障害が発覚したものである。

特筆すべきは彼女の自供が途中で反転したことではないだろうか？それと事件当日の家庭で何が起ったのか？実は私は独自の聞き込みで（警察は犯人が見つかったらそれ以上の調査は打ち切っている）隣室の住人からその夜の七時過ぎに霧島家から何か口論のような金切り声が聞こえたことを訊いている。

この事件間の短い（家庭でのいざこざから翌日の裁判に到る）間。この間に何かが隠されていることは確かである。そして一年前、二人が同時に見た映画。それから見始めたと思われる夢。これらは重要なヒントであろうと言えるだろう。

夜、昼間帰ってきてから他の担当している患者のカウンセリングを終わらし、メインディッシュというわけでもないが七時過ぎに私は遅れて二人の診察へ向かった。

食事をかたづける渡辺さんと入れ違いに私は病室へ入った。

「先生・・・！」

病室へはいるとすぐに目の前のベットから少し声高に彼は私を呼んだ。と、いうのも先ほど渡辺さんから聞いたが、どうやら昼間に

診療をしなかったので大分不安がっていると言うことだそうだった。彼は寂しがりやな性格でもあるのだ。

真珠色の透き通った肌の頬だけが少し赤らんだ少年少女はベットから”よいしょ”と素早く身を下ろした。

「どこ行つてたんですか・・・僕・・・」

そこまで言うとは彼の腰の前で両手を結んで黙ってしまった。そのまつげの長い大きな瞳はどこともなく潤んでいる。

「ごめんごめん、ちょっと用事があったね。でももう終わったから遅くなっちゃったけど会いに来たんだ。」

私はうつむきかげんの彼の頭に軽く手を乗せて撫でて慰めたりすると、彼はしばらく私の貌を見つめてから安心したように微笑んでベットに戻ってチョココンと座った。

私はそれからいくらか彼が今日やったことなどの感想や発見を聞いた。いたりした。

そうしてしばらくして頃合いを観て切り出した。

「ねえところで、こんな事を聞くのも酷だけど・・・キミはお父さんやお母さんが亡くなってすごく悲しいよね？」

聞くとそれまで楽しそうに笑みを浮かべていた彼の顔が少し硬直した。

「・・・・・・・・正直」彼はボソッと小さな声で呟く。

「僕・・・父さんや母さんが死んでしまったって聞かされたとき、何でかすぐに納得できたし、あまり悲しくもなかった・・・。ただ少し寂しくなって怖かった。それにみんな僕が父さんや母さんを殺したみたいに言うし・・・僕に・・・そんなこと出来るわけ無いんだ・・・。先生・・・先生は僕を信じてくれるでしょう？」

彼はしがみつくような瞳で私を見上げる。そうか・・・この子はやってないんだな。分かったことだが・・・。

「信じてるともだからもっと詳しく聞きたいんだ。」

私は彼の泣き出しそうな顔に強い同情を感じて、自分の顔が強ばっているのが分かった。

「あの日、何があったのか、覚えてる？」

そう訊くと彼は精一杯首を横に振った。

「覚えてない。あの日……学校から帰ってから全然なにも……僕よく分からないんだ……。気がついたら部屋の中で倒れてて……ベツトの下には……!!」

そこまで彼は訴えるように言うと……突如、貌を小刻みに震わし、息を飲み込めないような喉からのヒツヒツという奇声を上げた。これは「ヒステリー」明らかな拒否反応だった。私はすぐに彼の両手を握って話を変える。

「いい! いいよ、もう。思い出さないで。話を変えよう。」

しばらくそのまま焦点を失ってぶれた彼の瞳に私が写るように貌を近づけていたら、スーッと彼は平常心を取り戻した。余程怖い体験をしたのだろう……。彼はその時のことを無意識的に拒絶している。

「ごめんな……。」

私はいつの間にか立ち上がっていた自分の体を丸椅子に戻し、フウッと一息をつく。

それからしばらく他のことを話した。そしてまた期を見ては切り出す。

「ねえ、キミはお父さんやお母さんのことどう思ってたの？」

彼は少し拒絶的な反応を示し貌を強ばらせるが数秒私を見つめるとボソボソとまた語り始めた。

「僕……父さんが苦手です。」

「何で？」

「だって……男なのに働かないし、料理ばかり作ってるし、母さんの悪口を言うし……。」

ここで言い忘れてたので言っておくが、霧島家はいわゆる専業主夫と働く女で形作られていた。夫が家事をし、妻が会社つとめをするということだ。

「お父さんとは普段どういう関係だったの？」

「あまり……ていうより、もうずっと9歳くらいの頃から口もほとんど訊いてません。」

「9歳……？」

9歳と言えば彼女の方が学校へ行かなくなった頃と一緒か……。

「じゃあ今度は逆にお母さんのことはどう思ってたの？」

そう訊くと彼は少し微笑んだ。

「好きでした……。母さんは優しくて頼りがいがあって、僕のことを理解してくれて……。僕、父さんが死んだことより母さんが死んだことの方が少しショックです。それでも思ってたより悲しくないのが本当に変だと思います。」

彼は眉をひそめる。本当に自分の気持ちがチンプンカンプンに分からないのだ。精神科に来る患者は大なり小なりみんなそうだ。そして彼の場合、自分以外が居るのだから尚更だ。

「じゃあキミはいつもお母さんとはどういう風に暮らしてた？」

「……。普通です。母さんが帰って来ると出迎えて父さんの代わりに食事を出して一緒にお風呂に入ったり、眠れない日は添い寝をしてもらったり。休日是一緒に出かけたり買い物へ行ったりしました。」

「お母さんとお父さんは仲良くなかったの？」

「はい……。なんて言うか、冷めてたというか……。会話がないというか、お互い関心がなかったみたいです。」

「そう……。わかった。ありがとう。お母さんのこと、好きだったんだね。」

「はい、大好きでした。」

私はソコまで訊くと話題を変えることにした。少し思い出したのだ。

「ねえ、丁度一年くらい前。キミ一度学校を抜け出して駅前の喫茶店で映画を観たでしょ？メリーポピンズっていう。」

「……。あ、はい。よく知ってますね。」

「うん、ちょっと調べたんだ。それでさあ、その時のこと詳しく

話せないかなあ？」

彼はしばらく考え込む。

「・・・うーん。実は何かあんまり覚えてないんですよ。体育の時間にボールが頭に当たって、目が覚めたら漣でロードショーを観てたんです。それでそれからどうやって家に帰ったのかも覚えてないんです。本当に・・・。僕、こういうよく分からないこと考えないことにしてるんです。」

「うん、そうだね。考えなくていいよ。大丈夫。」

私は最後に彼女が学校へ行かなくなり、彼が父親と話さなくなったという9歳の頃のことを訊いた。しかし彼は「別に何か思い出にのこる様なことはありません」とのことだった。なんで父親と話さなくなったのかの理由もよく分からないそう。

それから私はしばらく他の雑談をした。そうしていれば時間がたつと自ずと彼女が現れることを知っていた。

「あれ？先生今晚は、またいつの間にか来てたの？てゆうか今日昼来なかったじゃん。さびしかったよお！」

おまちどおさま。

「いや、悪いね。ちょっと用事が立て込んでちゃってさ。」

私は彼女に彼に訊いた内容とほとんど同じ質問を間に雑談を交えながらした。

事件当日のことは彼と同じようなもので、よく覚えて無く、思い出そうなどと言う努力は私がさせなかった。

その次に両親への想いについて訊くとこれはまったく彼とは逆の返答が帰った来た。

「あたし、お母さんって嫌いだったんですよ。なーんかいつも威張ってるし、ケチだし、冷たいってゆうかたぶんあたしのこと嫌いだし。もうずっと前から口も訊いてなかったな・・・確か。」

「それはどのくらい前？」

「・・・9歳くらいの頃から、かなあ？でもまあその前からお母さんとは仲良くなかったと思うけど・・・。」

やはり9歳・・・。

「そう、じゃあお父さんについては？」

そう訊くと彼女は珍しくためらった。しかししばらく迷いキヨロキヨロ部屋の隅やら天井やらを見まわしたあと小声で背徳めいて口を開いた。

「・・・実はさあ、こんなこと先生だから話すんだけど・・・あたし、お父さんとデキちゃってたんだよね・・・。」

「・・・と、言うത്？恋愛関係にあった？」

「うん、てゆーか肉体関係。」

近親相姦で肉体関係まで・・・。無いことでは無いが、私は心なしか腹がたった。何故だかは分からない。とにかくこめかみから頭の中まで少し熱いものが通った。

「あたしお父さんのこと好きだったし、お父さんに抱かれてるとすっごく嬉しかった。お母さんよりずっとお父さんに愛されてるって感じも好きだったし。あたし・・・お父さんに恋してたんだよねえ・・・。あたしにだけ優しいお父さん、いつも家の中で二人一緒に居られるお父さん。あたし・・・なんでお父さんが死んじゃったのにこんなに悲しくないんだろ？」

二人は真逆だがどこか酷似した意見を持っているようだ。そして確かに・・・二人の言うとおりかもしれない。二人とも両親の死についてあまりにも肯定的すぎる・・・。

私はその後一通り父親との暮らしぶりを訊いて（平日の昼間のことは全て彼女の作り話だが・・・）次に一年前にメリー・ポピンズを漣で観た時のことを訊いたら、何と彼女の方も彼と同じくほとんど記憶にないとの事だった。二人の間に共通の記憶と共通の記憶の欠如が観られたのは大切なことだ。”どちらかが”ではなく”どちらも”というのは明らかにおかしいのだから。

そして最後に私は9歳の時のことについて訊ねたが、彼女は学校

に行かなくなったといった理由も、母親との今のような口も訊かない疎遠な関係の理由も分からないと言った。

いったい9歳の頃に霧島翼に何があったというのだ？

II

翌日、私は二人に催眠療法をかけることにした。

と、いうのも多数在る欠如した記憶、それに思い出そうとすると起こる「ヒステリー症状」の原因などを引き出すためである。ちなみにヒステリー症状は催眠療法により回復する確率が高いのだ。

そして何より二人に共通する記憶や記憶の欠如というのは明らかに異変であり、今までのデータから言えばどちらか一方が知ってることは反対側一方は知らないはずだし、その反対のどちらか一方の知らないことは反対側一方は知っているはずなのだ。

しかし私はその日絶望的なことを再認識することになった。

催眠療法はまず彼の方からした。ここで彼の方からと言うのが、もうおかしいことがお気づきだろうと思うが、本来催眠療法は解離性同一性患者の場合でもどの人格に療法を仕掛けようとも「無意識」は一人の人間に一つしかないため、開かれる先は同じである。であるから二人の場合も彼の方なら彼の方にだけかけて、それで無意識の認識を隆起させれば充分なのである。なのに何故彼の方からと言ったかと言えば簡単である。

私は二人共に催眠療法を実施したのである。そしてそれはつまり療法に失敗したとういことである。と、言うより何らかの拒否反応が起こっているのか不明だが、彼はまったく催眠にかかろうとしなかったのだ。

時折、そういった意識の固い人間はいる。故に私は彼の次に彼女にも試したのだ。しかし案の定、それも不発に終わった。

私は思った。

彼だ……。彼が邪魔をしていると。

最も恐れていた絶望的な事態だった。やはり彼は二人の何かを隠そうとしている。二人の記憶を操作し、二人の有り得ない関係を保持し、そして今また催眠療法による治療まで邪魔をする。彼の名は本当に「無意識」なのだろうか？ いったい無意識にそれほどの力があるというのか？ 私にそんな絶望的なことを認めろと？ ソレではどうやって霧島翼を救えと言うのだ。

私は正直、頭を抱えた。

彼は記憶にない、欠如した部分に潜む。仮に彼の名を「hollow」と名付けよう。ホロウとは日本語訳で「くぼみ」を意味するが、その真意は「欠如」のことである。

ホロウはいったいどうして姿を欠如したように隠すのだ？ ホロウが行っているであろう二人に対するお互いの隠蔽工作の真意はなんだ？ 何故に二人はお互いを知ってはいけない？

と、そう考えるとやはりあの二人の偏向的な生き方にヒントがある気がする。

何故ああまでも両親に対する観点が真逆であるのだろうか？ よもや役割分担とでも言うようなぐらいに二人はお互いの領域には足を踏み入れず自分を自分として平然と暮らしていく・・・役割・・・。役割か・・・。

ホロウを開ければ・・・確実に答えに繋がっているのだが・・・。ホロウは何かを隠している。ホロウはあの二人になんの役割を続けさせようとして居るんだ？

私はそれから毎日彼等に多種の心理療法を実施した。しかし、やはりどれもうまくはいかなかった。正直・・・私は苛立っていた。

毎日の診察を終える度に私の中で霧島翼に対する強い同情のようなものが育てられ、それは逆になんの助けにもなってやれない自分への苛立ちへと変わっていったのだ。

いつも診療が終わり部屋を出るときにはがっかりしている自分が嫌になる。いくつもの経験からタイプ分けや応用療法、私はこれ以上ないほどに息つまっていた。

しかし、私にも心理療法士としてのプライドというものがある。どうか引っかけりを見つけないでは……。

私は二週間ほどそんな日々を続けたある日、「夢分析」の方向を余儀なくされた。

いやしかし、やはり「夢分析」はダメだ。あの時、加々見市の喫茶店「漣」へ行って確認して、その夢について調べた方がいいが……結局の所、霧島翼はケースに当てはまらない。「タイプ論」的に考えても軸事態が不明すぎる。分析をしようにも比較の対象がないのだ。だからこれまで二週間、「ピンクパラソルの女」という最大級のヒントを野放しにしておいたのだ。手のつけようがないのだ。それとも何か？ 通説となった心理イメージをその夢にかこつけて霧島翼という異色の患者を適当な部類に分類して治療をしろとでも言うのか？ そんなことは出来ない。というよりそんなことでは人格障害を治すどころか、例の事件の真相を明かすことも出来ないだろう。しかしどうしてもあの子を助けてあげたい。と、そう思う私の心が無駄だと分かっているとしてもその「夢」に対する調査を実行させたのだ。

しかし、やはり夢の中の出来事を他の人間の心理パターンと比例させることはさっきもいったとおり無意味すぎる。あの子は根本的に普通では考えられない症状なのだから、比べる相手が居ない。となるとその心理現象よりソレにまつわる物体から調べていくしかない。

それは二人の共通の記憶であり、共に「ホロウ」を含む部位でもある。

「メリーポピンズ」私はそうしてその古い洋画を調べてみるようになった。

その洋画は元々は七作以上もある文学シリーズで、それをディズニーが映画化したものである。

内容は親にも知り合いにも懐かない二人の姉弟の元に「メリー」という乳母がやってきて世話をする上で「歌曲」を合わせながら、

この世の不幸な人の悲しみや喜びを分かり合うような姿勢を教育していくミュージカル映画であった。

物語の最初はメリーが雨の日に傘を差しながら風に乗って何所から飛んでやってくる。（おそらくこのシーンを翼はパラソルで空を飛ぶ女性に連想しているのだろう。）乳母のメリーは空も飛べたように実は魔法使いで、姉弟はだんだんに魔法をかけられたように心開いていくのであるが、その中に登場する一人の煙突掃除夫が居た。その掃除夫が歌った詩が「チムチムチェリー」である。

煙突掃除夫とは昔から西洋において多くの文学作品で取り上げられた職業だが、その在り方は一貫して「不幸者」の象徴であったと言える。汚く稼ぎは低くあまり人間扱いをされない可哀想な仕事であった。「チムチムチェリー」は作中でそんな煙突掃除夫の健気にも働き続ける姿勢を楽観的な詩の裏に悲観的な曲調を挿入することにより表現したものである。

この歌曲により何一つ苦勞などない姉弟は煙突掃除夫という、暮らしの中の底辺を支える人を少し理解するのである。

「メリー・ポピンズ」は四十年以上も前の映画で、この私ももちろんそのころは影も形も無かったものであるが、何故かこの歌を私は知っている。たぶんテレビの宣伝かディズニーの他の映画での宣伝かもしれない（テレビ番組（教育テレビなどで歌だけは放送されているらしい）で聞いたものだろう。そしてその歌は一回小耳に挟んだだけで忘れられないような心の奥底に引っかかるタイプの曲調を備えていたのだ）。

私はこの映画の新装版でDVD化されたものを入手し、ソレを二度ほど繰り返し聴きしみた。

物語の中の霧島翼と関係性の在りそうなものは一目には「傘を差し飛んでくる女」「チムチムチェリーという曲」ぐらいだったが、私は少し考えた。

物語には姉弟が登場する。そしてその姉弟は厳格で現実主義的な思想を持つ両親と疎遠な関係にある。この両親との偏った関係には

霧島翼両名の場合も真逆であれ共通してどちらか一方の両親に偏って嫌悪感と愛情を持っている分、映画と酷似してるとも見えた。

それに私はこの姉弟という設定自体に一瞬、二人の姿を被せた。そして私はフと気がつく。

その時私は病院の診察室にいたのだが、半ば山積みとなってきたいる数人の患者のカルテとその診療メモを机の上に散乱させてね。しかしそんなのそっちの気で私はあるものを探した。そのあるものとは二人の家族構成まで書かれてあるはずの資料なのだが……。心当たるところを全部見た後、私は引き出しを上から順に軒並み開けて観て、それでも見つからないので頭をかしげてから机の上の山積みを掻き分けたりした。

しかし見つからず次はナース達の所へ行き渡辺さんに訊いた。

「あの渡辺さん、霧島さんの資料ってどこに置いてあるんだっけ？」

「いやですねえ、先生。いっぱいごちゃごちゃした本やら何やらと一緒に持って帰っちゃったじゃないですか。家でやるって言って……。」

あ、そうか……。そうだった。必死で霧島翼の治療を研究しているうちに関係の在りそうな学説書や過去のカルテなどと一緒に家に持って帰ったんだった。

私はそのまま一度、病院を出た。そして家に帰って中に入る。もしもまた見つからなくても何時間かけても探してみせると意気込んで、自分の仕事用のデスクの上を見ると、どうやら幾つかの本の下に挟まれて白い紙はすぐに姿を見せてくれた。

私はその紙を手取る。

いや、警察からの資料では現在身内は居ないとあったので、深く確認しなかったと言ったらしい訳にしかないだろう。私はまったくソレを見落としていたと反省する。

その紙の中の端の枠に父と母の下に「兄（故）」と印刷してあったのだ。

しかもその兄は彼女の双子の兄妹。そして死亡時期は……十七年も前だった……。

どういうことだ？彼女が生まれてすぐに兄は死んでいる……。

私はそのあとしばらくしてから病院へ戻った。

午後三時過ぎ少し遅れて彼女たちの診察へ行く前に、フと喫茶店

(漣)の店長のみゆきさんの言葉を思い出す。

何かを吹っ飛ばして笑いたい……。何を？霧島翼はいったい何を吹っ飛ばそうとしているんだ？

||

「夢」それは「無意識」の産物である。過去の事例によれば「夢」を見ている人間が寝言で今までに不可能としていた外国語を流暢に口走ったり、難解だと思っていた事柄をいとも簡単に説明したりすることがあるという。これは前にもいったように「無意識」という存在が所有する強力な計算能力および集中力の表れであると現在では分かっている。そして同時に「夢」が「無意識」による意識へのコンタクトであることを明らかにしている。(近年では予知夢なども無意識による計算結果の現れと囁かれている。)

これは勘だが、「ピンクパラソルの女」という夢が意味するのは霧島翼にとって必ずしも過去のトラウマを表したものでないのではないだろうか？

いや、実は夢にも「過去視」「未来視」の分類があり、それぞれ「絶望的観測」と「希望的観測」があるのだが、普通、精神疾患患者(特にヒステリー系)において連続してみる似たような夢は「暗示」的には過去のトラウマを思い出していると考えるべきだが……霧島翼の場合はひよっとすると過去にあった厭なことを回想しているのではなく、未来に起こるかも知れない、もしくは起こって欲しい「未来視」的な夢かも知れないと思うのだ。

第一、トラウマといういわゆる「絶望的観測」の部類に属する心

的外傷だったら本人はその夢に何らかの疑惑や嫌悪感を覚えるはずである。しかし二人は嫌悪どころか「羨望」「希望」「開放感」さえ感じているのだ。

私はおそらくだが、あの夢は霧島翼の「傷」では無く「望み」ではないかと思ったのだ。

少し調べたところによると彼女の兄は難産であった双子の出産の後、救命処置もむなしく生後二日の命だったそうだ。

その日、私は霧島翼に死んだ双子の兄が居ることを知って、この事実を二人に確認しようと思い診察に赴いた。

病室のドアを開けると彼は素早くこちらを振り向いた。ベットの向かいにはTV番組が液晶の画面の中無関係に動いている。

「あ、先生。」

「ごめん、ちょっと遅くなったね。」

彼は”うんうん”と首を横に振ってテレビをそっちの気で私の方へ小走りに駆け寄った。

「それ、何ですか？」

キョロつとした眼で私の手元を一瞥すると言った。私はその手にDVDを一枚持っていたのだ。

「うん、コレね。今日はちょっと映画でも一緒に見ようかと思っ
てさ。いっつも話ばかりじゃ飽きちゃうからね。」

「え？映画っ！？わあ、なんていう映画ですかあ？」

期待に満ちた素直な瞳で彼は私の手元に一心に視線を集めた。

「うん、実はキミが見たことがあるヤツ。」

「え？なんだろう。何ですか？」

「メリー・ポピンズ。チムチムチェリーのヤツだよ。キミ、好き
だろ？この映画。」

「えっ！！本当ですか？やった。僕実は前からもう一度みたいと思
ってたんですよね。」

彼は予想通り喜んだ。私は彼の笑顔が好きだ。だから私の手から

そのDVDを彼の欲しそうな手に渡した。

彼は飛び跳ねるようにチカチカと番組を放映するテレビへ向かった。

「でも、ちょっと待って。」

しかし私は呼び止める。その前に訊きたいことがあるからだ。

「・・・？」

でもとのDVDデッキを後ろにして彼は振り返った。

「何ですか？」

「いや、どうでもいいことなんだけど、キミって兄妹はいた？」

私は彼のベットに端に腰掛けながら訊いた。

「・・・はあ、僕は一人っ子ですけど・・・？」

今さら何を？という様な貌で彼は答える。そして首をかしげてからすぐにDVDをつけ始めた。

私は知らず笑っていた。ほくそ笑むというか・・・まあ、当然だろう・・・。これで穴が見つかった。彼は兄妹のことを知らないのではない。おそらく覚えていないのだ。

【メリー・ポピンズ】その映画は二時間ちよつとの間、私たちを違う世界に入らせてくれた。

違う世界と言っても私は隣で座ってみている少女よりは現実を認識していた。ソレを見ている最中も私は少女の動きには注意を払っていたのだ。当然だがこの映画は”ただの暇つぶし”では無いのだから・・・。よもすれば私はこの映画を彼に今一度見せるだけで、何か成果を得られるような期さえしていたのだ。

しかしそんな甘い考えが、幾度もの挑戦をことごとくホロウにはじき返された私にはバカらしくも思え、実は期待半分を押し込めて最初から諦めていたのだが・・・だが、しかし、それなのに、その変化は如実に表れた。

それはオープニングを迎え、話が進みゆく前半、メリーさんが傘をさして飛んでくるシーンからもう始まった。

彼だった少女は彼女に変わる。それは表情の微妙な変化。突発的

に発せられる感想や感激の一言の違い。彼は私が何も話さなくても彼女に変わり、そのうち彼女はまた彼に戻る。

そんな繰り返しが永遠のように回り続けた。彼女かと思えば次の瞬間には彼に戻っている。映画の後半には二人の貌がルーレットの様に高速で切り替わった。

そして時期に映画は終わる。エンドロールを過ぎて画面がトップメニューに切り替わると、私は自分が異様に汗をかいていることに気付いた。どうやら自分でも何が何だか分からないぐらいに動揺している。二人がメリーポピンズを共通して見ていたのは、こういうことだったのか？

私は知らず貌をしかめながらもベットをたち、DVDを取って電源を切る。テレビも消した。

そしてどうも様子が変だった。

振り返り少女を正面に見ると、……私は妙なものを観た。

笑っていた。

いや、とても不気味なニタリ笑いのように見えたが、後から考えれば幼い子の莞爾の様なものだったのかも知れない。

「はじめまして、先生。」

少女は言って嗤った。

私は少女が彼でも彼女でも無いとすぐに分かった。元来美しい貌だった霧島翼だが二人の時のような脆さのようなものはその少女にはなく、ただ婉然とさえ言えるような綺麗さが不気味だった。

二週間以上、私は二人と向かい合ってきて、こんな貌をするのを初めて見たのだ。そう、ソレは間違いなく私の知っているあの二人では無い、と断言できるほどの違和感だったのだ。

「キミは……？」

私は息を飲み込むようにズッシリと口を開いていた。知らず顔の筋肉に力が入っている。私は……少女の瞳に吸い込まれてしまっただったのだ。

「わたしはわたしよ……。」

少女は嘲るように嗤う。たぶんそういうことなのだろうと私は思った。

彼女を見た瞬間から全てのパズルが繋がったような感覚が私の脳裏を覆っていたのだ。

「キミが本当の霧島翼なんだね？」

だから、そう確認した。それを彼女が一笑すると分かっている。

”クスクス”そして少女は案の定、三日月みたいに嗤った。同時に私の額からは夏でもないのに汗が垂れた。

「わたしは霧島翼、のほず、よね？」

彼女はほくそ笑み聞き返す。

「キミが・・・二人を知っていて、キミを二人は知らないのなら、キミはおそらくは・・・」

私は額に滲む汗さえ拭わない・・・。ホロウ・・・私の頭にはその名がぶら下がるだけだった。

少女は縮小したように動揺する私に絶えず嘲笑を浮かべていた。

私はそんな少女にますます気圧されていた気がする。

「でもそう、9歳くらいまでは少なくとも、霧島翼の体は私のものだったわ。」

少女は言った。一瞬もの悲しげな表情を見せて・・・。

私は状況を整理しようと頭を回転させながら、枕元の丸椅子を持つてきて彼女の前に座った。

||

学生の頃ドイツ、フランス、アメリカと三つにまたがって6年間ほど留学し、あっちで「未知忘却のくぼみ」と「魂の心理的中庸性」と中間点における歪みによる感情の増幅」という何ともヘンテコな論文で博士号をとり帰国し、この病院に勤めて約2年、私に不可能はないとうぬぼれたいと思うほど幾人もの患者を回復させてきたが、今回、これほどの患者にであって初めて自分の浅はかさというもの

を痛感する。結局は私も過去の症例だけを頼りに患者を「タイプ」に押しつけ「軸上のズレ」という要素を自分から引っこ抜き、決めている発展的でなく動きのない心理療法をしていたと気付くしだいだ。

メリー・ポピンズを見せることにより現れた霧島翼の新たな人格。しかしこれはおそらく新たなではなく、二人の大元となる最初の人格だと私はすぐに気がついた。

私はやっとその正体と出会ったのだ。

人間は手に触れられないと存在しないような諦め方をすることがあるが・・・本当に手に入れないものなど無いと認める心こそが、その正体をあばくことが出来る。

私は見つけたのだ。彼女は「無意識」でもなければ「二人」のうちどちらでもない。彼女は「ホロウ」。霧島翼が失った本当の霧島翼なのだ。私の考えは正しかった「ホロウ」は「無意識」ではない、二人の下敷きになって眠っていた彼女こそが「ホロウ」の正体だったのだ。

「右翼と左翼、あの二人は偏っていても動いていられるだけ良い。」

右翼・・・左翼・・・少女は二人をそう呼んだ。

「右翼はママが愛しかった。立派で優しくて強くて・・・、そんなママが好きで好きで好きで、同じくらいパパが嫌いだった。」

左翼はその反対。肉体が焼け付くほどの情熱を左翼はパパに感じた。その大きな手に抱かれるだけで左翼は幸せで、そんなパパを心から愛していたの

でもわたしは違う。ずっと一人だった。パパを愛することもママを愛することも二人で充分。わたしは長い間眠っていた。あの暗い暗い闇の底で・・・まるで永遠なんて味気ないものに浮かび続けるように・・・。」

少女は泣いているみたいな嘲笑を浮かべた・・・。まるで自分を

あざ笑って居るみたいで、ソレが滑稽で私は少し胸が締め付けられた。

「教えてくれるかい？キミの望みを・・・。」

私は少女の悲しみを見抜いて、少し冷静になっていた。

少女は戯けた嗤いをしたまま語りはじめた。

「ちょうど去年の春先・・・。わたしは頭を打ったおかげで目が覚めたの・・・。わたしは呆っとしていたわ。だから足の赴くままにあの喫茶店に行ったの。わたしの意思で体が動くのが妙で、どこかへ行ってみたかったのね。わたし思ってたわ・・・。この感じはなんだろう？遠い昔、わたしもこんな風に体を使っていた、って。

喫茶店で映画を見たわ。そしてわたしは羨ましいって思ったの。全てが羨ましいって。映画を見ていても、次期にわたしは二人にまた奪われる、って思うと辛かったわ。せつかく自由なんて素晴らしいものを思い出したのに・・・それはほんの僅かな一時の自由。

わたしはその日から自由に憧れるようになった・・・。」

そこまで言う頃には少女はもう嗤っていなかった。ことさら反対に・・・物静かに泣いているような表情にも思えたけど、それは嗤っているのと大きな違いはなかった様に思えた。

わたしは話し続ける彼女に黙って聞き続けた。

「それで、あの日祈りが通じたの。」

その日、パパと左翼は遅くまで愛し合っていたわ。ママは遅くなるって知ってたからよ。でも何故かその日、ママが帰ってきたの。パパと左翼は驚いたわ。こんな早く帰ってくるはずじゃないママが帰ってきたのだから。左翼なんかショックで意識が弱くなったぐらいに・・・。でね、その時わたしはチャンスと思ったわ。」

彼女はほくそ笑むように思い出しながら笑った。

「何も知らなかったママはパパと左翼の淫らな姿を見て絶句していたわ。もう、その時には霧島翼は左翼じゃなくて、わたしに変わっていたわ。」

わたし、ママに全部教えてあげたの。パパと左翼の情熱的な関係

をね。それでママに言ってあげたわ。

アンタなんかパパに愛されてない。アンタなんか金稼ぎの道具でしかない。この家ではパパとわたしだけが愛し合っているってね。

全部・・・左翼の気持ちを代弁しただけよ。

そしたらね。ママ笑ったわ・・・それでそのまま放心状態。へたり込んでちゃって。

わたしこの家族をグチャグチャにしてやりたかったのよ。修復できないくらい。それにわたし知ってたの。ママはプライドが高いのよ。

夜、ママはわたしの寝室にきたわ。暗い部屋の中、電気もつけないうで左翼に近づいて、首を絞めたの・・・鬼みたいな貌だったわ。左翼の上に馬乗りになって・・・でね、電気がついたの。眩しい明かりが灯ると、パパがドアの方から猛烈にママを止めようとしがみついたわ。

でも、ママは止まらない。ママはわたしを殺して自分も死のうとしてたのよ。あの人はそう言う人なの・・・。

で、パパはママが本気なのを知って、私の勉強机の椅子でママを殴ったの。左翼がね・・・首を絞められながら懇願するの。助けて・・・お父さんって、ね。だからパパは何としても助けたかったのよ・・・バカよね・・・」

そこで彼女はいったん苦笑した。心底バカにしたような嗤いは、逆に悲壮だった。

「パパは死んだわ。ママが死んだショックで目覚めた右翼がパパに言ったからよ。

人殺し・・・て。

そしたらパパは強く現実を拒絶して・・・後ろに後退していったの。それでさっき自分が壊してしまった椅子のローラー付きの脚に足を取られて滑って、窓を割って下に落ちたわ。

左翼も右翼もね。このこと覚えているはずなのよ。でも、あの子たち思い出したくないことはすぐに忘れてわたしに押しつけるから・

・・・」

やるせなそうに彼女は唇を噛み、それからまた平然と向き直る。

「パパとママを殺したのはわたしよ。祈りが通じたの……。だってわたしずっと願ってたもの。あの家から解放されたい。今の生活から解放されたい。パパとママから解放されたいって。」

先生知ってるでしょ？心で人は殺せるのよ……。」

何の疑いもない表情で私を見る彼女は可哀想なほど嗤っていた。

しかしそれは、偶然だ・全くの偶然だ。しかし彼女は信じている。自分の祈りが通じて両親という殻を吹き飛ばしたんだと……。

「でも……何で？」

彼女が言った。感嘆するような疑問の声だった。

「何で、パパもママも死んだのに……。あの二人は消えてくれないの？あの二人はパパとママがいるから生まれたんじゃないの？パパには左翼がママには右翼が……。そのせいでわたしは自由になれなかったのに……。なのに何で？」

彼女は誰に訊くでもなく私を見つめた。

「何で？わたしは結局自由になれないの？あの二人はどうやって消えてくれるの？」

気がめいるような声の嘆きだった。

「わたしは自由になりたかった。みゆきさんみたいな人になりたかった。わたしいつからか現れたあの二人に、あの映画の中の煙突掃除夫みたいに日陰に隠されて、わたしを奪われて、やっとソレを取り返せたと思ったのに……。なのにあの二人は消えてくれなかった。だからわたし警察に通報して、そうしたらきつとわたしを治してくれると思ったの……。」

懺悔を終わらすように彼女は嘆きを切らして黙った……。私はその悲痛に結ばれた口元を見て、正直、辛かった。

彼女は、二人という右と左の両開きの扉に蓋をされ、自由を奪われていたのだ。そしてふとしたきっかけで彼女の中のその不満に気がつき彼女はますますそう感じるようになったんだ。

自由になりたい。

誰もが感じる自立したいという感情。誰もが感じる飛び出したい気持ち。冒険心、探求心……。しかし、彼女は押さえ込まれていた。二人という殻に包まれて、何一つ身動きをとれなかった……。わたしは胸が痛かった。彼女のその泣いているのか笑っているのかさえ区別がつかないような表情を見つめているだけで、何もかもが許せなくなった。

何もかもを知っていても手を触れられないなら、こんなに不自由なことはない。こっちの子の悲しみも、そっちの子の苦しみも、お互いを知らなければこんな自由なことはないように……。触れられなければ、誰かを愛するということも誰かを憎しむということも、何の意味もない、何の価値もない、まるでそれは活きてない。

ピンクパラソルの女の夢は無意識に作られたのではなく、二人に束縛された彼女が見た望みだったのだ。無意識的に計算された暗示や警告でもなく、ただただ二人に塗りつぶされていた彼女がそうなりたいた切に願った姿だったのだ……。

なんて……。ヒドイ……。

私は自分の瞼の底が熱くなるのを感じて急激に想いを増した。

私は彼女に同情していたはずだった。でも今ではその同情は、まるで抱きしめてあげたくなるような愛情に変わっていることに気付く。

だからわたしはその瞬間動いた。

「……っ……っ……」

衝動的か感情的かは知らない、彼女の泣き出しそうな肩を崩れないうように抱いた。抱きしめた。そして願った。彼女を助けてあげたいと願った。

私は生まれて初めて泣いていた。

「……。離して……。わたし、こんなことされたって……。」
とぎれとぎれのか細い声で彼女は言った。しかしその体はもがき

もしない。そしてしばらくして彼女は私の背中に手を回した。

「キミを救きたい。」

私は言った。

「先生・・・わたしを救えるの・・・？」

彼女は小さな声でそう呟いた。

私は目を閉じて頷く。ただ流れる涙が彼女と私を分かり合わせてくれるような、感覚がその時間を融かした。

私たちはしばらくそのままお互いを確かめ合うと、離れた。

私は訊く。

「一つ、分からないことがある。」

「なに・・・？」

「キミは何で二人の気持ちを後ろから左右して、嘘の記憶まで創って、催眠療法を妨害した？そんなことをしなければ・・・。」

「わからない。」

彼女は片手で頭を抑えて貌をしかめた。

「わたし、パパやママが町の精神科に右翼や左翼を連れて行くこうとする度に、聞こえるの。」

「・・・」

「ダメだって。ソレはダメだって。二人に教えてはいけない。二人を壊してはいけないって・・・。だからわたしどうしてもあの二人をどうこうすることなんて出来なかった・・・。」

とにかくあの二人を知り合わせてはいけない。絶対に知ってはいけないって、そういう感じがまとわりつくの・・・。」

”ねえ、先生・・・わたしは自由になれないのかしら？”そう付け足して彼女は貌を伏せた。

涙の雫が一滴・・・落ちた。

私はその頬に手を当て、親指でそっと涙を救ってあげた。

「キミ、お兄さんはいる？」

私ははじめにそう確認した。すると案の定、彼女は首を横に振った。

一説によると人間はその人生の大半の悩みや疑問を9歳までの経験から構成するという。

幼児期において幼児たちに最も影響を与えるのは紛れもなく親である。その親の在り方次第では幼児は「多動症」「人見知り」「夜尿症」その他、生理疾患、精神疾患、などの多くの症候群を引き起こし、その「傷」は成長後も様々な形で人格に影響を及ぼすものである。

幼児期に両親から十分に満たされた愛情を感じれなかった幼児はその疑問を何時までも探し続けるだろう。そして何らかの決め手を見つけたら幼児はそれをどの様にして解決しようとするのだろうか？幼児にとってその愛情の欠如感をどの様に埋め立て、さらにその原因をどの様にしたら解消できるのか、それを考えるのは酷である。むしろそんなものは作り途中の未発達な思考を働かせるより、いわばオートと言っても遜色のない「無意識」によって解決法を算出しそれを実行させる方が余程好ましいのではないだろうか？

部屋は静かだった。私は電気を消して、午後の日差しだけが明度を保つ空間を作った。

彼女はベットの端に腰掛け、私はその正面にいる。診察というこの形式は観る者と観られる者という関係の中でありながら一見、ただ人間と人間が向かい合っているだけとも言える。

「目をつむって・・・安心して・・・。」

彼女は小さく頷くと目を閉じる。そして肩の荷をほどくように体の力を抜いた。

催眠療法・・・私は一度は試して失敗したその治療法を今一度実施することにした。

いま、二人の奥底で眠っていた彼女を呼び覚ました今なら、その

「抵抗」を突き破り、彼女の無意識を引き起こせると思ったからだ。私が前に言ったように無意識は意識を浸食した行動までは取らない、感情的にならないから衝動的にしかない。二人の人格を後ろから操っていたのも無意識ではなく、自由を願う彼女という人格の感情だったように。彼女はもう空っぽだ。もう誰も中から邪魔をすることなど出来ない。あと底に残るのは根元となる彼だけ……。自分でも知らない自分。それは二人によって押し込められていた彼女でさえ、持っているもの。

「無意識」ソレは何かも知っているもの。

二人の「ホロウ」であった彼女でさえ知らないこと。ソレは亡くなった兄のこと。それに自分が何故、治療の邪魔をしてしまったのか……。

「次、キミは私が”いいよ”と言って手を叩いたら目を覚ます。いいね？」

彼女は頷いた。それは催眠が成功していた証拠だった。

私は”よし”とうまくいって内心喜んだ。ついに彼女の意識外に触れることが出来るのだ……。

ベットの端で座る無意識の彼女を正面に、私は話しかけた。

「話してごらん。キミの辛かったこと、押さえ込んでしまっていたこと。全部、はき出してごらん。」

すると彼女は眼をつむったまま、ゆっくり口を開いた。

「わたし……ママに愛されたかったの……。パパはね、いつも家にいるの。でもね、ママはあまり家が好きじゃないの。」

彼女の口調は小さい子供のようにだった。

「わたし知ってるの。ママはわたしが嫌いだから家が嫌いな……。」

「どうして、ママは君が嫌いだと思うの？」

私は質問する。

「わたし聞いちゃったの……。ママとパパと知らないおじさんが喋ってるのを……。」

「・・・・・・・・。」

「わたしにはね・・・お兄ちゃんがいたのよ・・・でもね、お兄ちゃんは死んじゃったの。産まれるときにね・・・わたしは助かったけど・・・お兄ちゃんはわたしの代わりに死んじゃったの。きつとね・・・わたしがお兄ちゃんを殺したの・・・だからみんなこそこそ隠して・・・だからママはわたしを嫌いの・・・。」

無意識の彼女は本当のことを言っているだろう。私はその少女を心底、可哀想に思った。

まさか・・・外で働き娘の面倒を見きれなかった母親に対しての想いが・・・実の兄の死への罪悪感と・・・なんて惨い・・・。

「ねえ？わたし悪い子なの？わたしどうすればママに許してもらえるの？わたしお兄ちゃんを生き返らせなきゃいけないわ。わたしママにお兄ちゃんを帰してあげなきゃ・・・ママに嫌われちゃうもの・・・。」

「嫌わないよ・・・。」

私はそう言い返していた。彼女の勘違いだと・・・そんなの違うと否定してあげたくてしょうがなかったからだ。

「・・・・・・・・。」

彼女は黙った。私はその可哀想な小さな想いに突き動かされるように言う。

「誰もキミを嫌わないし誰にも君を嫌いになんかせせない・・・もう、泣いていいんだよ。辛かったこと全て吐き出して・・・楽になっいていいんだよ・・・。」

「・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・ごめ・・・・・・・・んあ・・・・・・・・さい・・・・・・・・お兄ちゃん・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・。」

目をつぶり眠りながら彼女は泣いているようにそう繰り返した。自分は生き残って兄は死んだ・・・そして母は自分を嫌っている・・・。その莫迦な思考の果てが兄を造るということに繋がったなんて・・・。私はパラノイア（偏執病）を思い出した。彼女は突然の兄の存在とその死の内容を偶然間接的に受け取って・・・その

時の感情を自分の中だけで膨らませた……。その結果が自分の中に兄を造り、母への接し方を知らない自分の代わりに母の愛情を受けさせ、父へ対しては今まで以上に愛好的な存在を用意したなんて……。

全てを口にして、彼女は安らかな笑みを浮かべていた。自我の防御のために無意識内に溜め込んでいた感情を発散することにより回復を見る催眠療法の効果の現れである。

しかし、これでやっと彼女は解き放たれるかもしれないが、その代わりの代価はあまりにも大きすぎたのではないだろうか？彼女は今回の事件で両親を失い、そのおかげでこうして解放されたとしても、これから先父も母もない、身寄りだってこの子には親戚が居ない。いったいこの子は誰を頼って生きていけばいいんだ？彼女はもう独りぼっちじゃないか……。

私はそう思うと未だ微笑み安らぐ彼女の寝顔を見ても悲しい思いを感じるだけだった。

そしてしかたなく私は手を叩いた。

「もう、いいよ。」

○

一ヶ月後……。

結局、わたしはママへの強い求愛のために自分を男【兄】に変え、その代わりに女としてパパの相手役を創った。でもそれはわたしが男【兄】になったんじゃないくて、男【兄】を作っただけ。わたしはわたし自身を自分の手で意識の奥底にしまっただけ。わたしは兄への罪悪感とその被害妄想がママに愛されてないという苦悩と繋がり、わたしの中に二人の存在を作らせた。9歳の頃に間接的に聞いてしまった真実にわたしは誰の肯定も否定も受け取れず、ただ自分の中で思い悩んでしまった。そのあげくが、自分の上に両開きの蓋を被せてしまうことになった。あの二人が今もわたしの中に居

ることは変わりはないけど、もうわたしの体はわたしの自由。二人はわたしの中のパパとママへの鎖でしか無いけど、それでもわたしにとって二人は変わらずわたし自身なんだと、今では思っている。

そして、今はこうして自分の傷害を理解し受け止めて、それを他の人に伝えられる。わたしは治った。

先生が言うには催眠療法とは、人間が心の内側である無意識に「トラウマ」となる過去を抑制してしまっている状態を、解放し自由にして発散させる療法なんだと言っていた。

私はそのおかげで過去を過去として意識によって認めた。

そして次期に退院できる。でもそれは良いことかも知れないけど、悪いことでもあるわ。だって・・・退院してしまったらもう先生には会えなくなってしまうもの。そんなのイヤ・・・。

「ねえ？先生。」

病室で先生はいつも通り微笑んでいるのにわたしは笑えなかった。だから、平然と”なに？”と聞き返す先生を見ていて腹が立った。先生はわたしと離ればなれになるのが寂しくないの？ニブいってほどでもないけど、わたしはもっと特別視をされたいのに・・・。

先生は何故わたしが睨んでいるのかわからないのか困った顔をする。これじゃあ、わたし悪者みたいじゃない・・・。先生の・・・バカ・・・。

「あ、そうだ。」

ずーっと睨んでいるうちに何だか怒り半分呆れてきたわたしに先生は切り出した。

「これ。」

スッと差し出した一枚の紙切れ。ソレを受け取ってわたしは思わず泣いてしまいそうになった。

「退院しても・・・会ってくれるの？」

紙切れを見てすぐに先生を見返すわたしは、半泣きで恥ずかしいけどそう確認した。

そうしたら先生は笑った。あの優しい暖かい笑顔で頷いてくれた。

紙切れには先生の住所と電話番号と”キミは独りじゃないんだよ”
というメッセージが書いてあった・・・。

もう、その夢は見ません。

ピンクは女の自由。

パラソルは飛ぶための道具。

女性は理想の形。

そして空は・・・いつも永遠にあるもの。

人は何故？なんて考えるのは、違う。

欲しいものを欲しいなんて言葉は、ウソ。

嫌われてるとか好かれてるとかなんて、同じ。

手に触れられないと存在しないなんて諦観・・・知らない。

ただ、今ここにいると感じるのは心があるから。

それはわたしたちが今も生きているから。

そして、あなたの瞳だけが本当のわたしを見つけ出してくれてい
るから。

だから・・・。

ピンクのパラソルで風を包んで、チムチムチェリーと歌うんでし
よう。

ピンクパラソルの女／END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6032i/>

ピンクパラソルの女

2011年2月1日03時33分発行